

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 66

第 35 回会長挨拶／学術集会のご案内

第 34 回会長挨拶／学術集会を終えて

第 34 回 総会報告

第 29 回 研究奨励賞受賞報告

重岡 学（神戸大学大学院）

第 3 回女性研究者がん転移研究グラント賞受賞報告

藤井 千文（信州大学）

寄 稿 北山 丈二 功労会員

（国立国際医療研究所）

募集案内

研究奨励賞/女性研究者がん転移研究グラント賞
役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第 35 回日本がん転移学会学術集会/総会の開催にあたって

会長 二口 充（山形大学医学部 病理学）

皆様、初めまして。

このたび、第 35 回日本がん転移学会学術集会・総会の世話人を務めさせていただくことになりました、山形大学医学部病理学講座の二口 充です。2026 年 7 月 30 日（木）、31 日（金）の両日、山形テルサにて開催いたします。

本年度のテーマは「腫瘍微小環境の制御による難治性癌克服への新戦略」です。文字にすると大仰に響きますが、実際の学会を見渡すと、もっと人間くさく、にぎやかで、時に混沌すら感じる“場”です。考えてみれば、それはまさに腫瘍微小環境（TME）の縮図にほかなりません。

腫瘍細胞はひとりでは生きていけず、線維芽細胞や免疫細胞、血管内皮細胞といった間質の仲間と複雑にやり取りしながら成長していきます。学会も同じです。基礎研究者は分子の奥深くに潜り込み、臨床研究者は患者全体を俯瞰する。若手は勢いよく増殖し、ベテランは環境を整える。多様性があるからこそ面白く、時に予測不能な方向に進むのです。

本学会の伝統といえば、何といても質疑応答の活発さです。質問はサイトカインのように四方八方から飛び交い、発表者はシグナル伝達経路のごとく必死に応答します。議論がうまくつながれば「シグナル伝達成功」、ずれば「ノイズシグナル」。ときには暴走して「サイトカインストーム」化することもあります。それすらも学会の醍醐味。傍から見れば炎症反応そのものですが、終わってみれば確かな記憶として残る“免疫応答”になっているはずです。

フロアーに目を向ければ、間質細胞である Audience が、発表者という腫瘍細胞に向かって次々とシグナルを送り、相互作用している光景をしばしば目にします。CAF のように会場全体をまとめる人もいれば、マクロファージのように議論を炎上させる人もいます。ポスター会場は多様な細胞集団がひしめく間質そのものであり、コーヒブレイクは研究者に欠かせない生存シグナル。懇親会に至っては、エクソソーム交換どころか、もはや“代謝産物”まで共有しているように見えるほどです。

さらに、実際の腫瘍微小環境においては、腫瘍と間質の相互作用が持続することで不均一性が徐々に増していくことが知られています。同様に、学会でも時間をかけて多様な研究者が交わり続けることで、単なる寄せ集めではなく、より奥行きのある“学術的多様性”が形づくられていくのです。

今年度は、国際癌転移学会（MRS）との連携を深め、基礎と臨床を隔てることなく、若手もベテランも分け隔てなく交わる場を目指しています。その一環として MRS とのジョイントセッションも予定しており、国際的な視点から議論を深める絶好の機会になるでしょう。

ここで改めて強調したいのは、「やはり現場に足を運んでいただくことの大切さ」です。ご存じの通り、サイトカインの多くは遠隔ではなく近距離で作用します。同じ空間で顔を合わせ、言葉を交わし、時には余計な“ノイズシグナル”すら含めてやり取りするからこそ、真の相互作用が生まれるのです。学会という“腫瘍微小環境”に身を置くこと自体が、新しい戦略の萌芽につながります。

私たちががん転移学会は、単なる情報交換の場ではなく、難治性癌という人類共通の課題に挑むための知の共同体です。ここでの議論や出会いが、腫瘍微小環境を制御する革新的な戦略につながり、将来の患者さんの希望へと結実することを強く信じています。

第 35 回日本がん転移学会学術集会・総会が、皆さまにとって心地よくも刺激的な“腫瘍微小環境”となり、その相互作用から次代を切り拓く力が生まれることを願ってやみません。世話人として、この使命を胸に、学会がさらに飛躍するよう全力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

会期 : 2026 年 7 月 30 日（木）～31 日（金）

会場 : 山形テルサホール（JR 山形駅から徒歩 5 分）

第 34 回日本がん転移学会学術集会・総会を終えてーがん転移学会 会員の皆様へー

第 34 回日本がん転移学会会長 山本 浩文
(大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻生体病態情報科学講座 分子病理)

2025 年 6 月 19 日 (木)・20 日 (金) に、淡路島の淡路夢舞台国際会議場にて、第 34 回日本がん転移学会学術集会・総会を開催致しまして、無事終えることができました。例年にもまして、たいへん多くの演題を頂き、淡路の地まで多くの皆様に足を運んで頂き、また活発な学術討論を頂けたこと、心より御礼申し上げます (参加者 287 名)。

夢舞台への交通の便ではご不便をおかけしましたが、講演会場、ポスター会場となった渡廊、宴会場、ホテル設備も含めてたいへん素晴らしい環境であったことが印象的であり、快晴にも恵まれ、リゾート気分も混じた思い出深い学会となりました。

当日の運営は教室のスタッフと学生 (学部 4 年生と大学院生)、社会人となった卒業生も手伝いに駆け付けてくれて総勢 30 名を超えるラボメンバーで行い、大過なく進行できたことはチームで心をひとつにして事を成し遂げたという全員の財産となりました。教室員が作った学会のメインポスターでは、安藤忠雄氏建築のドームの一角に玉葱籠がひっそりと置かれていたこと、全員懇親会会場の後ろのほうで何気に淡路のバーチャル観光のビデオが流れていたことお気づきになられたでしょうか。淡路人形座の演舞の下見や、グランドニッコー 3 人同室も可能かを検証する宿泊体験、三ノ宮から淡路への朝の通勤ラッシュで込み合う高速バスの混雑具合を調べるための舞子駅からの試乗、淡路のしらす丼や玉葱スープの試食会など、1 年間教室員と共に楽しみながら準備をさせて頂き、学会開催の機会を与えて頂いた土岐理事長に感謝しています。

私の力不足のため資金準備が十分ではなく、経費節約のために参加費は当日の現金払いのみ、スライドは事前回収させて頂くなど、皆様にご負担をおかけしましたこと、お詫び申し上げます。どうなることかと心配していましたが、ご参加の皆様全員につつがなくご協力頂きましたこと、心より御礼申し上げます。

学会終了後、多くの先生方からプログラムもよかったとお褒めの言葉を頂き、色々なセッションを組ませて頂いた中で、いずれかに見るべきところがあったのではないかと安堵しております。また二日間を通じて第 1 会場、第 2 会場やポスター発表でも、活発な意見交換が絶えなかったことは、この学会で例年みられることで、日本がん転移学会の益々の発展を確信したことをお伝えいたしまして、開催報告の結びとさせていただきます。



第 34 回学術集会 若手奨励賞受賞者 (山本会長を囲んで)

左から (WS1-1-1) 村上 智哉、(WS2-1-2) 近藤 真白、(WS2-1-4) 田中 智大、(WS7-1-4) 舟橋 伸昭
(WS7-2-2) 周 越、(WS8-1-2) 宗片 勇史、(PS7-1-3) 宮崎 允、(WS7-2-6) 辻本 愛実 (敬称略)

第 34 回日本がん転移学会総会記録

2025 年 6 月 19 日（木）評議員会（淡路夢舞台国際会議場）で下記報告事項と議案が審議され、さらに同日の総会において報告・承認された。出席者 57 名、委任状 1 名

1. 庶務報告

1) 会員状況（2025 年 6 月 17 日現在）

個人会員：491 名	法人会員：2 社
名誉会員：19 名	功労会員：32 名
物故役員：顧問 3 名	名誉会員 10 名 功労会員 8 名

事業報告

1) 学術集会

2024 年 7 月 20・21 日奈良春日野国際フォーラムに於いて学術集会を開催しました。

2) 評議員会・総会

2024 年 6 月 27 日の学術集会開催時、奈良春日野国際フォーラムに於いて評議員会の議を経て 2023 年度収支決算・2024 年度予算、第 34 回副会長二口充選任を審議決定し、総会にて報告しました。

研究奨励賞を 1 名、女性研究者がん転移研究グラント賞を 1 名に授与し、受賞講演は翌日 28 日の学術集会にて行いました。

3) 理事会を 3 回開催

（2024. 10. 15：WEB、2025. 05. 12：WEB 2025. 06. 18：淡路夢舞台国際会議場）

4) ニュースレターの発行……Vol. 64（2024 年 9 月）、Vol. 65（2025 年 4 月）

2. 2024 年度収支決算および監査報告書が提出され承認された（次ページ）。

3. 2025 年度予算（案）が承認された（次ページ）。

4. 次期(第 36 回)会長に三森功士先生が、次々期(第 37 回)会長に樋田京子先生が選出された。

5. 2025 年度役員が承認された（役員名簿のページ参照）。

6. 名誉会員に伊藤和幸先生が、功労会員に北山丈二先生、浜田淳一先生が推戴された。

7. 研究奨励賞を 1 名に授与した。

重岡 学 さん（神戸大学大学院医学研究科 病理学講座）

8. 女性研究者がん転移研究グラント賞を 1 名に授与した。

藤井 千文 さん（信州大学先鋭領域融合研究群 バイオメディカル研究所）

9. 年会費について、年齢で分けることが報告された。

学生と 35 歳までは現状通りで、36 歳以上と評議員は 3,000 円アップ。

10. 会則、役員選任規定が改定された。（ホームページをご参照ください）

2024年度収支決算

(収入の部)

自 2024年 1月 1日
至 2024年12月31日

科 目	予 算	決 算	差 異
年会費	(2,700,000)	(2,830,000)	(130,000)
個人会費	2,300,000	2,430,000	130,000
法人会費	400,000	400,000	0
戻入 ※第33回総会補助費	0	100,000	100,000
雑収入 (サンメディア)	0	165	165
預金利息	(10)	(20,528)	(20,518)
普通預金	10	164	154
定額預金利息		20,364	20,364
収入合計	2,700,010	2,950,693	250,683
繰越金	8,200,611	8,200,611	0
総 計	10,900,621	11,151,304	250,683

(財産目録)

自 2024年 1月 1日
至 2024年12月31日

科 目	金 額		
I 資産の部			
流動資産			
普通銀行預金	795,829		
郵便振替口座	238,488		
郵便定額預金	6,000,000		
流動資産合計		7,034,317	
資産合計			7,034,317
II 負債の部			
流動負債			
未払金	0		
流動負債合計		0	
負債合計			0
正味財産			7,034,317

(支出の部)

自 2024年 1月 1日
至 2024年12月31日

科 目	予 算	決 算	差 異
事業費	(2,200,000)	(2,200,000)	(0)
学会総会補助費	1,500,000	1,500,000	※ 0
研究推進活動費	0	0	0
研究奨励賞費	200,000	200,000	0
女性 Grant 賞	500,000	500,000	0
会議費	(0)	(0)	(0)
理事会等会議費	0	0	0
管理費	(1,950,000)	(1,916,987)	(33,013)
印刷製本費	250,000	245,158	4,842
通信運搬費	280,000	271,782	8,218
消耗品費	25,000	25,795	△ 795
給与・手当	1,360,000	1,360,640	△ 640
旅 費	10,000	5,880	4,120
諸 雑 費	10,000	7,732	2,268
ホームページ費	15,000	0	15,000
予備費	(500,000)	(0)	(500,000)
支出合計	4,650,000	4,116,987	533,013
繰越金		7,034,317	
総 計	10,900,621	11,151,304	250,683

※：2025年度「第34回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

#：女性 Grant 賞は田中紀子功労会員から2023年度に5年分(年50万円)一括納入

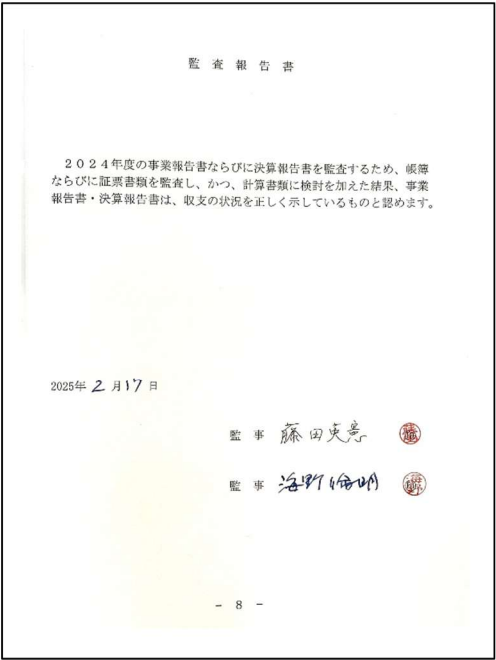
2025年度予算

自 2025年 1月 1日
至 2025年12月31日

科 目	収入予算	科 目	支出予算
年会費	(2,750,000)	事業費	(2,200,000)
個人会費	2,350,000	学会総会補助費※	1,500,000
法人会費	400,000	研究推進活動費	0
		研究奨励賞費	200,000
		女性支援 Grant 賞	500,000
預金利息	(10)	会議費	(0)
		理事会等会議費	0
		管理費	(1,961,000)
		印刷製本費	250,000
		通信運搬費	280,000
		消耗品費	25,000
		給与・手当	1,360,000
		旅 費	4,000
		諸 雑 費	27,000
		ホームページ費	15,000
		予備費	(500,000)
			500,000
収支合計	2,750,010		4,661,000
繰越金	7,034,317		5,123,327
総 計	9,784,327		9,784,327

※：2026年度「第35回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

#：女性 Grant 賞は田中紀子功労会員から2023年度に5年分(年50万円)一括納入



第 29 回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して

受賞課題：口腔癌の転移形成初期段階において惹起される癌細胞と間質細胞の分布・位置関係の変化

重岡 学（神戸大学大学院医学研究科 病理学講座 分子病理学分野）

この度は大変栄誉のある賞を賜りましたことを誠に光栄に存じます。第 34 回学術集会・総会においては受賞講演の機会まで設けていただき、選考に携わって下さった先生方、これまで多くのご指導をいただきました先生方、ともに研究に取り組んでくれた同輩の方々に深謝申し上げます。

私は 2006 年に神戸大学医学部口腔外科で口腔外科手術及び一般歯科治療の研鑽を積みました。口腔がんハイボリューム施設において、不良な生命予後や治療後の著しい QOL 低下を伴う症例を多く担当する中で「口腔がんは予防・早期発見がすべて」と考えるに至り、その足がかりを探索すべく大学院博士課程（病理学・口腔外科学ダブルメジャーコース）に進学しました。

日本がん転移学会で初めて研究成果を発表したのは、2012 年にオリエンタルホテル広島で行われた第 21 回学術集会ポスターセッションでした。当時の私は、大学院生として食道扁平上皮癌の腫瘍随伴マクロファージの機能解析に従事していました。歯科口腔臨床系の学会発表の経験しか持ち合わせていなかった私にとっては、多彩なバックグラウンドをもつ専門家が活発な討議を交わす雰囲気は圧倒されましたが、自分の取り組んだ研究に様々な方からご助言や温かいコメントを頂戴し、新たな気付きを得ると同時に、がん研究に携わる歯科医師として自身の専門性を深めたいという目標を持つことができました。

また、私は臨床医として口腔外科および病理診断科の双方に所属しながら顎口腔疾患の臨床病態と顕微鏡的变化の両方を自身の眼で見て記録することを実践して参りました。口腔がんは、先述の如く、進行症例では緩解に至ったとしても治療による QOL の低下は免れないことから、転移形成初期過程に相当する浸潤性獲得の評価が極めて重要となります。しかしながら、その基礎的知見の蓄積と整理は十分とは言えず、普遍性・再現性のある検査・診断法の確立には至っていません。そこで、研究面では現在は転移性口腔がんの正確な早期病理診断法開発を目標に活動させていただいております。

癌組織においては、癌細胞の周囲には間質成分が存在し、これらの相互作用により癌という病的組織が成立しています。私は日々の診療で得た知見を端緒として、人体癌組織に対する免疫組織化学やヒトの細胞を用いた様々な培養系モデルの確立し、癌細胞と間質細胞の相互作用を解明に注力して参りました。今回の講演では、これまで取り組んできた成果の中から、「口腔癌の発生・進展におけるマクロファージの間質から上皮内への局在変化と、それに伴い惹起される癌細胞との相互作用の変化が治療や診断の新たな標的となること」「間質浸潤に伴う組織破壊に対し、骨髓由来間葉系幹細胞が動員され炎症性癌関連線維芽細胞へ分化し、マクロファージとの協調作用によりリンパ節転移に関与する可能性」について報告させていただきました。今後は、シングルセル解析や空間トランスクリプトーム解析など新たなアプローチを導入し、本研究を発展させたいと考えております。

会期中は天候に恵まれ、地元兵庫県の風光明媚な淡路島において多くの先生方に研究成果を発信できたことは大変よい思い出です。また、会長講演・シンポジウム・一般演題と大変に高度かつ充実した内容で、演者の先生方と有意義な討論を行うことができました。特に、市民公開講座としても開催された【シンポジウム3 がんとの共生】では様々なお立場の方からの話を拝聴し、これからのがん研究に対する期待と解決すべき課題の両方について改めて強く実感し、身の引き締まる思いとなりました。

最後に将来の展望について述べたく思います。口腔がんが早期に発見されないことについて様々な理由が考えられますが、ここでは「口腔がん早期発見のゲートキーパーは一般開業歯科医である」ことを強調したいと思います。我が国における歯科医療の大部分を担う一次医療機関において口腔がんの診査・検査が適切に実施されなければ、患者が早期の段階で高次医療機関を受診することは望めません。定期的な口腔ケア・義歯作製とメンテナンスなど、継続的な口腔内処置を主体とする一般歯科診

療は、口腔粘膜の定期的な観察の観点から、口腔がん早期発見において大きなアドバンテージがあると考えられます。2015年に液状化検体細胞診（Liquid-based cytology；LBC）を活用した口腔がんスクリーニングのガイドラインが示され、観血処置に馴染みの無い一般歯科診療の場でエビデンスに基づく検査が可能となり、普及と充実が期待されています。LBCの最大の特徴として、細胞形態の評価のみならず、残余検体を用いて免疫細胞化学や遺伝子検索が可能であることが挙げられます。今後は、これまで取り組んできた癌-間質相互作用に関する研究を細胞診検体をソースとして発展させ、がん研究と歯科医療に新たな潮流をもたらしたいと考えております。

振り返りますと、2012年の日本がん転移学会デビューを機に、多彩な領域における最先端の情報に常に接することで研究者としての視野を広げることができました。まだまだ浅学菲才の身であり、これからも諸先輩方の背中を追いかけて研鑽を重ねて参りたいと存じます。今後とも変わらぬご指導の程よろしくお願いします。

写真：左から

土岐祐一郎 理事長

重岡 学（研究奨励賞）

藤井 千文（女性グラント賞）

山本浩文 第34回会長

（敬称略）



第3回日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞受賞

受賞課題：予後不良胃がんに対する α GlcNAcとMUC6を指標とした診断法・治療法の確立

夏休みの自由研究 課題名：女性は理系科目が「苦手」なのか？

藤井 千文（信州大学医学部医学科/バイオメディカル研究所）

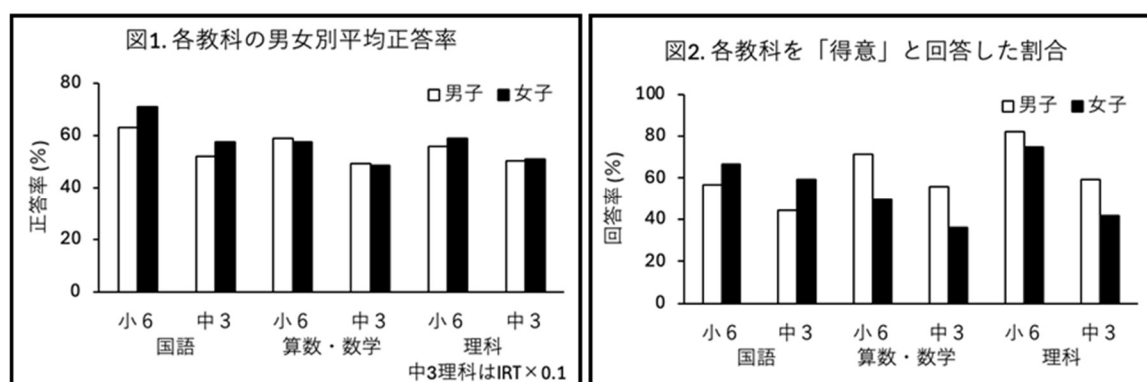
この度、第3回 日本がん転移学会 女性研究者がん転移研究グラント賞を賜りました、信州大学の藤井千文と申します。このような学術賞を賜りましたことを大変光栄に存じます。本賞を設立された田中紀子先生、第34回日本がん転移学会学術集会・総会 会長 山本浩文先生、選考委員の先生方ならびに関係の皆様、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。あわせて、これまでご指導くださった先生方、困っている時に支えてくださったラボメイトの皆様、本会会員の先生方をはじめ、研究の世界でご縁をいただいた皆様からの温かいご助言と励まし、さらに研究の場からは離れていますが、家族や友人の支えにも深く感謝申し上げます。

さて、本賞は「女性」を対象としたものであることは、タイトルからもおわかりいただけると思います。学会規定には「がん転移研究の将来の担い手を目指す女性研究者のキャリアアップを支援することを目的とする」とあります。「女性は支援しないとキャリアアップが難しいのか？」そうではない先生方も多くいらっしゃいますが、世の中の風潮としてその必要性が認められているのも事実です。また、第 84 回日本癌学会学術集会にて「がん研究における女性研究者シンポジウム」での講演の機会を頂きました。学会事務局からは「女性研究者を応援すること」が本シンポジウムの趣旨だと伺いました。このように、女性研究者が応援され、リーダーシップを発揮することが求められています。一方で、理系の女性が「リケジョ」と呼ばれ、特別視されている現実もあります。なぜ、このようなことが起こっているのでしょうか？

そんなことを考えていた折、2025 年 8 月 1 日の信濃毎日新聞に、長野県内の学力テスト結果を報じる記事が掲載されました。

『理数「得意」との回答 女子の割合低く 「バイアス」背景か』

本記事は、共同通信発表の記事を引用して同紙がまとめ直したもののことでした。文部科学省は、今回初めて学力テストの各教科の結果を「男女別」に集計しました。その結果、理系科目の正答率に男女差はほとんど見られない一方で、理系科目を「得意」と答えた女子の割合は圧倒的に低いことが明らかになったのです（図 1, 2；文科省の調査結果をもとに藤井が作成したもの）。以下は信濃毎日新聞記事からの抜粋です。～各教科を「得意」とした女子の割合は、国語は小中とも男子を上回り、算数・数学と理科はいずれも少なかった。成績上位層でも理数を得意とした割合は女子が低かった。文科省は、「女子は理系が苦手」といったアンコンシャスバイアス（無意識の思い込みや偏見）が背景にあるとみている。～



なぜ、成績が良くても「得意」とは思えないのか？そもそもアンコンシャスバイアスとは何か？理科（特に実験）が大好きで、小学生の頃から自称「得意科目理科」としてきた私は、この原因を探るべく、半ば遊び心で「夏休みの自由研究」として実験をしてみることにしました。以下は、今年の夏休みの自由研究実験記録です。なお、本稿に示すのは手書きの実験ノートではありませんが、その点はご容赦ください。

タイトル：女性は理系科目が「苦手」なのか？

目的：1. 女性は理系科目が「本当に苦手なのか」を解析し、苦手意識が生まれた原因を解明すること。2. この問題解決に向けて「現在私ができること」を明らかにすること。

背景：この度、女性研究者を支援・応援するための荣誉ある機会を頂いた。そのような中、2025 年 8 月 1 日の信濃毎日新聞に上述のような記事が掲載されていた。以上より、現在女性研究者を「支援・応援」して頂けることの時代背景と必要性について調査することとした。

方法：生成 AI に質問を投げかけ、回答を得る *in silico* 解析を行った。AI の回答は時によって変わ

るため、異なるチャットルームで同じ質問を3回行った。生成 AI を用いた理由：男女のバイアスがかからない状態での調査結果が得られると考えたため。使用した生成 AI：ChatGPT 5。質問内容は結果の項に示した。

結果：各質問に対する回答をまとめたものを表に示した。男女の能力差はほとんどなく「日本の女性は理系科目が『苦手』」という見方は事実ではない、との結果について3回の再現性が得られた。この理由について、「固定的な性別役割観・社会規範が根強いこと」「日本の職場・家庭制度や慣行が影響している」ことが挙げられた。この問題解決のために私ができることとして「ロールモデルとしての発信やアウトリーチ」「メンタリングやネットワーク形成」「採用・評価の透明化やバイアス対策」が提案された。以下に、生成 AI を用いた3回の *in silico* 解析結果をまとめた表を示す。

1. 日本の女性は理系科目が「苦手」なのでしょうか？

回答回数	回答内容
3回共通	能力差はほとんどない／「苦手」は事実ではない。 PISA 2022で数学の男女差は男子＋9点にとどまり、理科は日本全体が世界上位。
2回共通	女子は自己効力感や自信が低く、それが進路選択に影響する(AI2,AI3)。
1回のみ	女子は全教科で評点が男子より高い傾向(AI2)。 OECD横断研究で女子は能力に比べ数学への自信が低い(AI3)。

2. 「女性は理系科目が苦手」というアンコンシャスバイアスが日本でなぜ生まれたのか教えてください。

回答回数	回答内容
3回共通	固定的な性別役割観・社会規範が根強いこと。 日本の職場・家庭制度や慣行が影響している。
2回共通	ロールモデル不足と職場構造が原因(AI2, AI3)。 自己効力感や進路期待に影響(AI1, AI3)。
1回のみ	早期の文理分岐や履修制度が影響(AI2)。 医系入試不正事件など「構造的バイアス」の例(AI2)。

3. 現在、理系の大学や学会で「女性研究者」を支援・応援する様々な取り組みがなされています。このような取り組みは「必要」なのでしょうか？理由とともに述べてください。

回答回数	回答内容
3回共通	必要である。 日本の女性研究者の比率(約18%)が国際的に低水準であるため。
2回共通	多様性は研究の質やイノベーションに資する(AI2, AI3)。 文科省やJSTによる公式施策がある(AI1, AI2, AI3)。
1回のみ	英国Athena SWANや米国のバイアス研修の効果(AI1)。 「ダイバーシティイノベーション・パラドクス」の補正が必要(AI2)。

4. 日本以外の国での「理系科目」についての女性の考え方や「女性研究者」の活躍状態などを日本と比較してください。

回答回数	回答内容
3回共通	日本は学力が高いが研究職で女性比率が低い。 EUは女性研究者比率が3割超、日本は18%前後と大きく差がある。
2回共通	米国はSTEM分野で日本より女性比率が高い(AI1, AI3)。
1回のみ	日本の工学系卒業女子比率16%など進学段階での低さ(AI2, AI3)。 日本は「理学では残るが工学で細る」特徴(AI3)。

5. 私は「がん研究」に携わる 52 歳の女性です。国立大学の助教です。「女性は理系科目が苦手」というアンコンシャスバイアスを解消するために私にできることは何でしょうか？

回答回数	回答内容
3回共通	ロールモデルとしての発信やアウトリーチ(女子中高生への活動など)。 メンタリングやネットワーク形成。 採用・評価の透明化やバイアス対策。
2回共通	学内・学会の制度やダイバーシティ施策の活用(AI1, AI3)。 推薦状や評価の書き方改善(AI1, AI3)。
1回のみ	研究に「性差の視点(SABV)」を組み込む(AI2)。 データで可視化し岳寧改善につなげる(AI1)。 学会内で男女比公開や託児設置を提案(AI2, AI3)。

6. 女性を特別に「支援・応援」しなくても「女性がん研究者」が男性研究者と同等になる日は来るでしょうか？

回答回数	回答内容
3回共通	自然増だけでは困難。制度的な支援が当面必要。 現状の女性研究者比率は低く、国際水準との差が大きい。
2回共通	EUや海外では制度的介入で改善が進んだ(AI1, AI3)。
1回のみ	「特別扱いではなく構造的な歪みを是正する装置が必要」(AI1)。 「支援が不要な状態を早く作ること」がゴール(AI2で強調)。

考察：1. 女性は理系科目が「苦手ではない」と判断した。苦手意識が生まれた背景には「男性は仕事、女性は家庭」という日本の慣例が強く関わっていると考えられる。2. この問題解決に向けて、「現在私ができること」は、学生のロールモデルとなるような仕事スタイルを常に発信すること、であると結論づけた。

今後の課題：別の生成 AI にても解析を行い、再現性を確認する。

私は、学部 4 年次に研究室に配属された時から、身近に「女性教員」がいる環境で育ちました。4 年次から修士課程の 3 年間（金沢大学理学部化学科）、大学院博士課程の 3 年間（金沢大学薬学部）、博士課程修了後に非常勤研究員として着任した研究室（金沢大学がん研究所）には、それぞれ女性の先生がおられ、皆が私にとって大切なロールモデルとなっています。考えてみると、25～30 年前当時、「女性教員」が在籍する理系研究室はごくわずかでした。私は幸運にも、常に女性教員が身近にいる環境に恵まれました。2006 年に信州大学へ異動後は、自分自身が研究室で唯一の女性教員となりましたが、時を経て、出産や育児と両立しながら研究活動を行っている女性研究者の姿を目にするようになり、今では身近に多くの女性研究者が活躍しています。私は出産・育児を経験しておらず、家事は夫と分担し、料理は夫が担当しています。この話を同僚にしたところ、ある男性教員からは「男にメシを作らせるとは何事だ！」との声を頂きました。一方で女性コメディカルの方からは「それこそがこれからの働く女性の姿であり若い学生のお手本になって欲しい」と励まされました。今回の実験結果から得られた「固定的な性別役割観」を映し出す出来事でした。

2001 年に金沢大学がん研究所非常勤研究員として「がん研究」に携わり始めてから、気がつけば 25 年目になりました。今回「女性研究者を支援する」賞を頂いたことをきっかけに、今度は私自身が、女性に限らず、研究に携わるすべての学生に良きロールモデルとなり、これまで通り「実験・研究は面白い」という思いを若い世代に伝えていく決意を新たにいたしました。これまでは、先生方にご指導頂きながら、いつまでも「若手」の気分でおりましたが、そろそろ次世代を支える側に回らなければなりません。もちろん、研究そのものでも「がん転移を未然に防ぐ」方法の確立を目指して、研究成果を挙げるべく精進してまいる所存です。今後とも、会員の先生方の変わらぬご指導とご厚情を賜れましたら幸いに存じます。

寄稿：がん治療の未来へ

功労会員 北山 丈二(国立国際医療研究所・外科腫瘍学研究部)

「光陰矢の如し」とはよく言ったものである。大学病院でがんの治療と研究に携わって、いつの間にか 40 年の時が過ぎ、今春、定年退職を迎えたのだが、この度、思いがけなく本会の功労会員に推薦していただいた。関連の先生方に厚く御礼を申し上げるとともに、果たして「功労」に値する仕事ができただろうか？甚だ心もとない気もする。

振り返るといろんなことがあったが、今も心に残る情景がひとつ、ある。初期外勤時代に若年女性のスキルス胃癌の手術を担当した。術者として初めて執刀した「リンパ節郭清を伴う胃全摘術」で、指導医の先生に教えられながら何とか手術を終え、合併症もなく喜んで退院された。若手外科医として「満足感」に浸っていたのも束の間、3～4か月後には腹水が溜り、食事がとれなくなった。検査にて、腹膜再発が判明、抗癌剤治療も全く効かず、あっという間に亡くなってしまった。これが、「腹膜播種」との最初の出会いであった。臨終の際、病室の隅で、おばあちゃん(かな?)に抱っこされた2～3歳くらいの女の子が静かに眠るお母さんの顔を不安そうに見つめていた。考えてみれば、あの時のあの少女の潤んだ瞳がその後の自分の生き方を決めてしまった、、のかもしれない。

がん薬物療法が大きく進歩し、消化器癌の患者予後も格段に良くなったが、全身投与された薬剤は腹膜病変には届きにくいと、腹膜播種患者の予後は未だに改善していない。脂溶性抗癌剤タキサンは、腹腔内投与すると局所に長く停留し、播種巣の表面から直接腫瘍内に浸潤し、播種に著効を示す。この基礎データに基づき、全身化学療法にパクリタキセル反復腹腔内投与を組み合わせた治療法を開発し、臨床試験にてその有用性を検証してきた。その多施設共同第三相ランダム化臨床試験の名称をPHOENIX-GC 試験という。PHOENIX、和名で不死鳥または火の鳥。全身が黄金色に輝き、その涙は人々に癒しをもたらす、その血を飲むことによって永遠の命を授かる。数百年に一度、自ら炎の中に飛び込んで焼死するが、灰の中から再び幼鳥となって現れる、という。我々にとっては、昭和の巨匠、手塚治虫の作品群で馴染みが深い。厳しい余命宣告をされた患者さんたちに、明日への希望を捨てないで治療に臨んで欲しいという意図を込めて試験名に用いた。現在、世界中でこの治療法に関する追試が行われており、進行した腹膜播種の胃癌患者さんでもなんとか2年近くまで予後を延長することが可能になってきている。

さて、この間の基礎研究にて、我々の腹腔内には多分化能を有し免疫を強く抑制する間葉系幹細胞(MSC)のような細胞が存在し、癌細胞と共にマウスの腹腔内に移植すると癌関連線維芽細胞(CAF)に分化し、播種の形成を強く促進することを見つけた。この結果から、この細胞は健康時には腹膜損傷を修復する生理的役割を担っているのだが、がんはこの細胞の持つ再生能力を利用して腹膜播種性転移を形成しているのではないかとと思うようになった。どうもこの種の細胞は我々の体のいたるところに常在しており、がんの進展に深く関わっているようである。

考えてみれば、がんは成体の中に新たな組織を造るワケだから、再生現象の一種、と言っても良いのかもしれない。皮肉なことだが、世界中の医療者が競って研究する「再生」をがんは既に実行しているのである。ただ、がんが「再生医療」と決定的に異なる点は、再生したその器官の機能が個体を「殺す」ことである。確かに、個体がずっと生存し続けると、食糧不足は必発、生存競争が激化し、生命環境は劣悪になる。また、環境変化に対応する進化現象は起こらず、種は絶滅に向かうに違いない。一方、遺伝子は個体が消滅しても、子孫のDNAに乗り換えて「生き延びる」ことが出来る。多少、穿った見方かもしれないが、がんとは、利己的といわれる遺伝子が自らの存続の可能性を高めるために、一時期だけ寄生していた個体を消滅させる目的で生体の中に「生命停止器官」を再生させる現象、と考えても良いのではないだろうか？

じゃあ、我々医療者はこの生物学的現象に対してどう対応すべきなのだろう？筆者には、まだ明確な回答は見出せてはいない。ただ、数多くの死にゆく人たちと付き合ってきた過程で、思うことがあ

る。たとえ個体の生命が途切れても、すべての人の「いのち」の中に、遺伝子と共に未来に残していける形而上的事象がきっとあるに違いない。人がつくる共同体の中で、個人が果たすべき役割を真摯に認識し、遂行することによって、その人が持つ「思想」や「精神」が次の世代へと受け継がれ、未来という実態を構築する。この事実こそが、永遠の生命を持つという PHOENIX 伝説の真意であり、限られた時間の中で一人一人の患者さんがそういう「対象」を見つけ出す環境を整備することが、がん治療に関わる者たちが取り組むべき最も重要な仕事なんじゃないかと。

コロナ禍が蔓延した令和初期に国民的物語となった「鬼滅の刃」では、最終決戦を前にして、永遠の命を希求する鬼の始祖・鬼舞辻に対して産屋敷が静かに語る。「君は思い違いをしている。永遠というのは人の想いだ。人の想いこそが永遠であり、不滅なんだよ。」生命は、何十億年という長い歳月を経て、個の命を犠牲にし、世代を重ねることによって「想い」をつないでいくシステムを築き上げてきた。Risk-Benefit に関する Bioinformatics で埋め尽くされようとしている現代医学の中に、今一度、この「いのち」の本質をじっくりと考えてみるスペースを確保しておく必要があるのではないだろうか？

今年も暑い夏を迎えている。容赦なくふり注ぐ陽射しの下、心身ともに「衰え」を感じる日々ではあるのだが、「貴方には、もう少し、やるべき仕事が残っているんじゃない？」一遠くへ旅立った諸先輩方や患者さん達から、そう声を掛けられているような気がしてならないのである。

★ 日本がん転移学会 研究奨励賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

★ 日本がん転移学会 女性研究者がん転移研究グラント賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/05.html>

両賞の募集期間：毎年 4 月 1 日～9 月 30 日

募集要項・申請書等については、事務局までメールでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail : jamr2021-office@umin.ac.jp

事務局から「毎年応募者が少ないので奮ってご応募ください！」

※ 会則、役員選任規定はホームページをご参照ください

日本がん転移学会役員

理事長： 土岐 祐一郎
副理事長： 越川 直彦
会長： 二口 充（第35回）
次期会長： 三森 功士（第36回）
次々期会長： 樋田 京子（第37回）

前会長： 山本 浩文
理事： 加藤 幸成
福島 剛
監事： 吉治 仁志
評議員： 青木 正博

五井 孝憲
三森 功士
エーザイ(株)

足立 靖
板野 直樹
猪原 秀典
江口 英利
沖 英次
加藤 靖正
神田 光郎
北台 靖彦
小泉 桂一
坂本 毅治
高野 重紹
滝野 隆久
田中 美和
長野 一也
野田 剛広
藤田 直也
増田 慎三
宮田 博志
安田 卓司
山本 博幸

園下 将大
大鵬薬品工業(株)

有明 恭平
伊藤 心二
上北 尚正
大島 正伸
尾崎 充彦
亀井 尚
菊池 寛利
口丸 高弘
粕 雄一朗
佐藤 慎哉
高橋 剛
竹内 裕也
谷口 博昭
永野 浩昭
早川 芳弘
藤原 俊義
松尾 洋一
望月 早月
安本 和生
山本 真義

瀧口 修司
石井 秀始
稲田 全規
上原 久典
大塚 英郎
掛地 吉弘
唐澤 秀明
北川 透
国安 弘基
堺 隆一
清水 史郎
高橋 秀典
竹田 和由
中 紀文
中山 淳
東 伸昭
藤原 義之
水間 正道
森 誠司
矢野 聖二
由井 理洋

(アイウエオ順)

事務局幹事： 大植 雅之

評議員任期：2024年6月29日～2027年/第36回総会まで（第34-36回） 評議員年会費：13,000円

日本がん転移学会 名誉会員・功労会員

名誉会員： 愛甲 孝
高後 裕
佐藤 博
谷口 俊一郎
宮坂 昌之

伊藤 和幸
小林 博
清水 英次
田原 榮一
安井 弥

入村 達郎
今野 弘之
清木 元治
夏越 祥次
横田 淳

太田 哲生
済木 育夫
曾根 三郎
新津 洋司郎
渡辺 寛

功労会員： 伊藤 壽記
垣添 忠生
久保田 俊一郎
清水 暁
田中 紀子
中森 正二
宝来 威
宮崎 香
矢守 隆夫

伊東 文生
片岡 寛章
桑野 信彦
高橋 俊雄
茶山 一彰
中山 淳
細川 真澄男
向田 直史
渡邊 昌彦

岡田 保典
神奈木 怜児
小林 浩
竹之下 誠一
寺田 雅昭
西村 行生
松浦 成昭
森 正樹

小野 真弓
北山 丈二
佐治 重豊
竜田 正晴
中津川 重一
浜田 淳一
宮城 妙子
矢野 雅彦

日本がん転移学会 物故役員

物故顧問： 菅野 晴夫
物故名誉会員： 佐藤 春郎
鶴尾 隆
門田 守人

杉村 隆
末舛 恵一
螺良 英郎
Isaiah J. Fidler

明渡 均
田中 健蔵
中村 久也

塚越 茂
磨伊 正義

物故功労会員： 東 市郎
久保田 哲朗

阿部 薫
豊島 久真男

尾形 悦郎
馬場 正三

北島 政樹
武藤 徹一郎

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)		会員番号	
氏 名		生年月日	
勤	勤務先名称(部所属も記入してください)		
務	〒		
先	Tel	Fax	
	E-mail		
自	〒		
宅	Tel	Fax	
	E-mail		
雑誌等送付先を○で囲んでください。			
勤務先 ・ 自宅			
変更年月日 西暦 年 月 日 付で変更します			
退 会 届 西暦 年 月 日 付でもって退会します			
その他			

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====

[発行・編集]

日本がん転移学会事務局

Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)

E-mail : jamr2021-office@umin.ac.jp

〒541-8567

大阪市中央区大手前3丁目1番69号

大阪国際がんセンター・研究所内

=====

2025.09